

## 教育思想史学会

## 第22回大会プログラム

2012. 10. 13~2012. 10. 14  
東京大学本郷キャンパス

## 「大学の危機」を思想史が問う

報告者：吉見俊哉（東京大学）／金森 修（東京大学）／松浦良充（慶應義塾大学）

司会者：田中毎実（武庫川女子大学）／相馬伸一（広島修道大学）



20世紀末以降、グローバル化やICT革命等による知の変容のもとで、大学はもっぱら社会的有用性に応えているかどうかという機能面に偏って評価されるようになってきている。現在の大学というシステムは、それが歴史的捏造であったか否かをおくとしても、〈フンボルト理念〉に代表される〈古典的理念〉によって規定されてきた。しかし、現在、この理念がどの程度まで通用するのか、あるいは廃嫡の扱いを受けねばならないものなのかが問われる事態となっている（金森修）。

800年を超える大学史は「大学の危機」への応答の歴史であり、応答を続けることによって大学は知的組織体であり続けてきた。しかし、近年の大学を取り巻く状況への知的応答が当事者であるはずの大学人によって十分に行われているとは言い難い。これは、大学人の中で大学のあるべき姿（理念）をめぐる言説の応答が十分になされていないということによると考えられる。言い換えれば、大学の相対的な自律性を可能にする「大学の思想の不在」という事態といえよう（松浦良充）。この認識が大きくはずれていないとすれば、現在の事態はこれまでになかった大学の危機といえる。というのは、それが知的組織体としての大学の終焉を示唆しているからである。

とはいえ、大学人にとって大学を論ずることは意外に容易ではない。大学は自己のよって立つ基盤であるがゆえに相対化することが難しい。そこで思想史のアプローチが意味を持つ。大学の理念なり思想は、具体的な社会状況や問題との対峙をとおして歴史的に構成されてきた産物と見なされるからである。そこで本シンポジウムでは、大学を取り巻く思想史的文脈に参照しながら、「大学の今」をいかに認識することが可能であるかを論じたい。それをとおして、大学概念自体の再定義、「大学とは何か」という問いへの未来に向けた新しい答え（吉見俊哉）に接近したい。

パネリストには論客が顔をそろえる。ここでは、これ以上ネタを明かすことはせず、当日飛び交うであろう言説のキーワードのみをあげておく。「大学のさまざまな死」、「メディアとしての大学」、「フンボルト理念」、「大学の社会からの遊離と孤独」、「古典的教養の問い直し」、「機能主義的の大学観と大学の反知性主義」、「有用な知とりべらるな知」、「アーカイブとエンサイクロペディア」、「専門知とは異なる俯瞰知の可能性」、「新しい印刷術と新しい大航海時代」、「社会への根源的な問いかけ」、「大学の意味の再構築」…。

大学人には自己言及を避けるという傾向があるかもしれない。しかし、本シンポジウムではそのステレオタイプを裏切りたい。ただし、大学人の大学論が私憤レベルに終わってしまわないために、私たちが「何の意味があるのか」と言われながら、それでもこだわっている「思想史」という回路を通して…。企画者は、このシンポジウムが単なる大学問題の思想史的検討ではなく、「大学の危機」という論点を足がかりに、教育思想史という私たちの土俵そのものを「相互的」に問う機会にしたいと考えている。会員をはじめ、多くの皆さんの（積極的な）参画を期待している。



## 大会参加費

一般		学生・非常勤	
会員	¥2,000	会員	¥1,000
非会員	¥2,500	非会員	¥1,500

## 懇親会費

一般	¥2,500	学生・非常勤	¥1,500
----	--------	--------	--------

## 大会日程

### 第1日 (2012. 10. 13)

10:00 ~ 11:15 教育学研究科棟・第一会議室  
理事会・編集委員会合同会議

11:00 ~ 教育学研究科棟・ラウンジ前  
受付

12:00 ~ 13:45 教育学研究科棟・156教室  
**Forum 1**  
戦後日本の教育学・理論の発展と国際コミュニケーション

14:15 ~ 16:00 教育学研究科棟・156教室  
**Forum 2**  
近代日本教育学史の構想

16:15 ~ 17:00 教育学研究科棟・156教室  
総会・奨励賞授賞式

17:15 ~ 19:00 教育学研究科棟・ラウンジ  
懇親会

### 第2日 (2012. 10. 14)

9:20 ~ 教育学研究科棟・ラウンジ前  
受付

10:00 ~ 12:30 **Colloquium** 教育学研究科棟  
「私たち自身、今の(原子力)時代を  
どのように理解するのか?」 第一会議室  
歴史と思想のあいだ 359教室  
ヴィゴツキーはマルクスをどう読んだのか 361教室  
教育思想家は「科学」をどう考えてきたか? 265教室

昼食は中央食堂をご利用ください

13:45 ~ 16:45 赤門総合研究棟・A200  
**Symposium**  
「大学の危機」を思想史が問う

会員控室 教育学研究科棟・ラウンジ  
大会本部 教育学研究科棟・213教室

教育思想史学会事務局

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40  
日本大学文理学部教育学科 下司研究室気付  
事務局 E-Mail: hets@chs.nihon-u.ac.jp

## Forum 1

第1日  
12:00~13:45  
教育学研究科棟・156教室

### 戦後日本の教育学・理論の発展と 国際コミュニケーション

—国立旧制大学における  
教育哲学担当者を手がかりに—

報告者：鈴木篤 (大分大学)  
司会：池田全之 (お茶の水女子大学)

日本の教育学・理論は明治以降、フランス、ドイツ、アメリカ、旧ソビエト連邦など、諸外国の教育学・理論から強く影響を受けながら、約150年の間に急速な発展を遂げた。こうした発展過程については、主に明治期から昭和初期までの時期を中心に、各時代の代表的な人物の取り組みを手がかりとして比較的詳細な分析がすでに加えられているが、他方でそれ以外の人物の営為については依然として看過されたままである。そもそも、どのような時期にいかなる人物がどの大学に在職していたのかは、一部の例外を除いて、ほとんど学術的に解明されていない。

著名な教育学者以外に着目するかたちでの研究は、わが国ではこれまで主に教育社会学的視点から描き出されてきたが、例えばドイツではテノルトやホルンらにより理論史・科学史的視点から研究が進められている。そのため本フォーラムではホルンの研究『20世紀ドイツの教育科学 (Erziehungswissenschaft in Deutschland im 20. Jahrhundert)』を参照しながら、第二次世界大戦以後の時期に国立旧制大学で教育哲学を担当した人物を主な手がかりに、日本の教育学・理論の発展過程を描き出したい。研究の見通しを述べるならば、この作業は戦後の教育学・理論がどの時期にどのような国に依拠するかたちで発展してきたのかについて、再度可視化させることにつながると考えられる。

## Forum 2

第1日  
14:15~16:00  
教育学研究科棟・156教室

### 近代日本教育学史の構想

—思想史の方法をめぐる個人的総括—

報告者：森田尚人 (中央大学)  
司会：田中智志 (東京大学)

明治維新をフランス革命と対比させ、民主化・大衆化の不徹底さをもって、日本資本主義の跛行的性格を強調するのが、戦前期から引き続く戦後社会科学の通説だった。だが、明治公教育体制が欧米社会とほぼ同時的に成立したことは、明治維新を19世紀「行政革命」の歴史的文脈のなかで捉えなおす必要性を物語っている。このように制度的変化を世界の同時代性において把握することができるのであれば、このことは思想界の動向についていっそうあてはまるだろう。19世紀後半の進化論や20世紀のマルクス主義がわが国の思想界に与えたインパクトを例にとるまでもなく、明治以降の教育学者の学問的営為は欧米社会に通底する思想圏のなかで展開されたのである。報告者はそうした視点から、伊澤修二と吉田熊次の教育学思想の形成過程をたどってみたいことがある。

欧米において思想史研究の歴史はそう遠くに遡るわけではなく、ラブリョイにはじまるこの学問分野のめざましい展開は、報告者の生きてきた時代とほぼ重なる。history of ideas あるいは intellectual history と呼ばれる思想史の方法は、19、20世紀思想の背景画をさまざまに描き出して、われわれの研究を鼓舞してきた。ともすれば、西洋の学問・思想の移入的性格が強調されがちな日本の教育学の歴史的展開を追認するために、こうした思想史の枠組や方法がどこまで有効であるかを検討してみたい。

# Colloquim

2012.10.14(第2日) 10:00~12:30

## Colloquium 1

教育学研究科棟・第一会議室

「私たち自身、今の(原子力)時代をどのように理解するのか？」(Th.リット)  
—知のアンビバレンスと責任—

企画者：小笠原道雄（広島大学名誉教授）

司会：木内陽一（鳴門教育大学）

報告者：D. シュルツ(ライプチヒ大学 Th.リット研究所長)

通訳：山名淳（京都大学）

指定討論者：野平慎二（富山大学）

「私たち自身、今の(原子力)時代をどのように理解するのか？」は、Th.リットが1957年、旧西ドイツ政府(国防委員会)主催の会議「現代の運命的諸問題」でおこなった講演タイトルである。そして昨年、3.11の福島第一原発の重大事故を受けて後、10月、ライプチヒ大学で開催された第15回Th.リット国際シンポジウムでは「原子力時代。自然科学と技術の極大値。責任の最高値」として改題された。1986年4月チェルノブイリ原子力発電所事故の災害を体験しているヨーロッパ諸国の人々には、福島第一原発事故はきわめて深刻な問題であった。周知のように、ドイツ政府は直ちに脱原発に踏み切った。ただリットは本講演で「核エネルギーの利用に賛成か反対か」を述べているのではない。そこでは欧州における自然科学の発展とその技術への応用プロセスが巨視的に鳥瞰されている。人間が発見し、それを技術に応用する人間の思考と、その人間によって創出された技術が根本的に対立。技術が事象自体の持つ法則に従って人間の思考と無関係に突き進む点に、リットは原子力利用の危険の可能性の本質と問題の根源を見ているのである。その上で、究極的にわれわれが、その対立をより高い次元でいかに解決するかの問題に論を展開している。

今回の報告者D. Schulz所長は、リットのこの「時局論文」の思想と論理を今日の原子力(核)エネルギーと人間形成の問題に展開し、思想(史)的にその問題を把握し、問題解決の方途を探ろうとしている。報告者と共に教育思想史研究者がこの問題を考え、問題解決の方途を探求することは、教育(学)研究者としてその社会的責任を担うとともに、責任を果たすことになると思われる。

## Colloquium 2

教育学研究科棟・359教室

歴史と思想のあいだ  
—新教育を素材に  
教育思想史の可能性を探る—

企画者：大崎裕子（南九州大学）

司会：田中智志（東京大学）

報告者：大崎裕子、田口賢太郎(東京大学大学院)、木下慎(東京大学大学院)

指定討論者：橋本美保（東京学芸大学）

教育思想史学会20周年を迎えるにあたって刊行された『教育思想史コメンタール』（2010）において、2006年以降の本学会の特徴を分析した下司晶氏は、「脱歴史化」の問題を指摘している。本学会における教育史研究者の減少はすでに2003年頃から顕著であることも明らかにされているが、今また、教育思想（または教育哲学）／教育史が結節した教育思想史を探ることは可能なのだろうか。

ここでは、今年2月に上梓された『プロジェクト活動—知と生を結ぶ学び』（東京大学出版会）を一つの手掛かりとした。本書は教育哲学プロパーの田中智志氏と、教育史プロパーの橋本美保氏による共著であり、現代の教育実践はもちろんのこと、大正昭和期の日本の教育思想にまで論及した著作である。これを契機に本年度からは、両氏が中心となって、若手の教育哲学または教育史研究者が集まり、新教育の“構造的”把握を主眼とした日本の新教育思想史研究会が立ち上がっている。この研究会での議論をもとに、本書で取り上げられている新教育を素材に新たな教育思想史の可能性を探りたい。

## Colloquium 3

教育学研究科棟・361教室

ヴィゴツキーは  
マルクスを  
どう読んだのか

企画者：吉國陽一（東京大学大学院）

司会：吉國陽一

報告者：吉國陽一、岡花祈一郎（福岡女学院大学）、椎野大輔

指定討論者：青柳宏幸（中央大学・非常勤）

ヴィゴツキーの思想がマルクスの哲学に基礎を置くものであることは、既に多くの研究の中で指摘されている。しかし、以下のヴィゴツキーの言葉が示唆しているように、ヴィゴツキーがマルクスをどのように読み、自らの思想形成の手引きとしたかを知ることは容易なことではなく、彼の研究プロセスの具体的な検討を通してのみ明らかになると考えられる。「心理とは何かということ、私は数カ所のマルクスからの引用を切り貼りするだけで、苦も無く理解しようとは思わない。どのように科学を構築するか、どのように心理学研究へアプローチするのかということ、マルクスのあらゆる方法から学ぼうと思っているだけである」

本コロキウムでは、ヴィゴツキーの科学的研究における弁証法的方法の適用や、概念発達論と内言論の問題、思想史的な検討など、複数の観点からヴィゴツキーがマルクスをどう読んだのかという問題に迫ってみたい。

## Colloquium 4

教育学研究科棟・265教室

教育思想家は  
「科学 (Wissenschaft)」を  
どう考えてきたか？

企画者：小山裕樹（東京大学大学院）、河野桃子（東京大学大学院）

司会：小野文生（京都大学）

報告者：小山裕樹、河野桃子、岸本智典（慶應義塾大学大学院）

指定討論者：柴山英樹（聖徳大学）

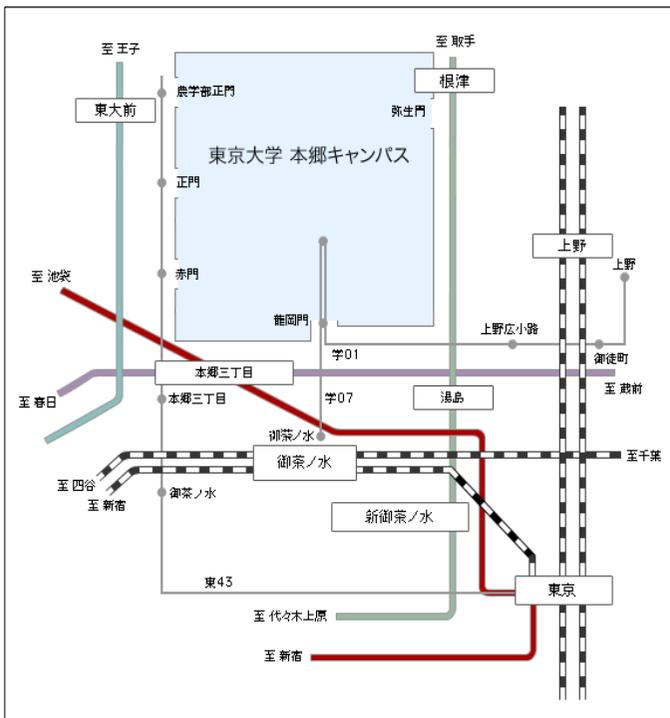
例えばドイツに目を向けるならば、19世紀の初頭より常態化した、ロマン主義的 - 観念論的哲学に対する敵視は、1831年のヘーゲルの死後加速する観念論的体系の衰退とともにますます強まり、哲学は単なる一つの「世界観」だと見なされるようになった。そして、こうした哲学に成り代わって、自然科学的な経験諸科学が自らの「科学性」を強調するようになる。「科学」理解のこういった転換が19世紀のドイツで生じ、そこに生きた哲学者たちはみな自然科学的な経験諸科学への理論的応答を余儀なくされながら、それぞれ独自の「科学的」諸体系を構築することとなった。体系乱立時代の到来である。ところで、当時の哲学者たちがそれぞれに有した「科学」観は、彼らがそれぞれに描いた教育思想にもまた、当然反映しているものと考えてよいだろう。その意味で19世紀ドイツは、「科学」と哲学、はたまた「科学」と教育思想の関係を今日問い直す上で、豊かな素材を提供してくれるかもしれない。本コロキウムでは、以上のような見通しのもと、この19世紀ドイツをそれぞれの文脈で経験した教育思想家たちを、具体的には、ヘルバルトを小山が、シュタイナーを河野が、ドイツの哲学・心理学からの影響関係に見るジェームズを岸本が採り上げ、彼らの「科学」観と教育観とを照らし合わせることを通じて、「科学」と教育の関係を多角的に再考することを目指す。

教育思想史学会  
第22回大会  
会場案内

# 東京大学本郷キャンパス

東京都文京区本郷7丁目3番地1号

教育学研究科棟  
赤門総合研究棟(シンポジウムのみ)



## 本郷キャンパスまでの交通機関

- 東京メトロ丸の内線「本郷三丁目」駅 徒歩 8分
- 都営地下鉄大江戸線「本郷三丁目」駅 徒歩 6分
- 東京メトロ南北線「東大前」駅下車 徒歩 1分
- 東京メトロ千代田線「湯島」「根津」駅徒歩 8分
- 都営地下鉄三田線「春日」駅下車 徒歩 10分

赤門をくぐると左右に見える大きな建物が、第22回大会の会場です。

左側が教育学研究科棟（受付、フォーラム、コロキウム、総会、懇親会）、  
右側が赤門総合研究棟（シンポジウム）です。



教育思想史学会事務局

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40  
日本大学文理学部教育学科 下司研究室気付  
事務局 E-Mail: hets@chs.nihon-u.ac.jp